

## 基督教修道院の宗教思想

日野眞澄

基督教修道院と云ふは基督教史上に於て monastery 又は monasticism と稱するのを譯したのである。修道院と云ふ語は果して適譯なりや否や、多少の疑なきにもあらねど、今我國にては一般に此語を用ゐて居るやうである。多分我國に於ける唯一の基督教 monastery であらうかと思はるゝが北海道函館の附近にあるトラピスト (Trappist) の經營に係る者が修道院と稱せられて居るから、今は便宜上之を修道院と呼ぶ事にしたのである。固より monastery 本來の意義より云へば是は希臘の *Monachos* 即ち孤獨的生活を營むと云ふ語より出たのであるから、之を獨棲主義とか隱者生活とか、獨身制度とかと譯しても差支はあるまい。されど monastery 制度を生むに至らしめたる所以の精神を推せば、是は宗教家が神に親しまんが爲めに道に精進するのを指すのであるから、之を修道院と譯すのも宜しからうと思ふ。

基督教を代表すべき制度は基督教會のみではない。修道院も確かに之を代表し

得べき一の制度である。而かも普通には教會のみを以て基督教を代表せしめて居る。西洋の習慣に據れば基督教史を基督教會史と云ふて居るのである。西洋の大學にも教會史 (Church History) とか Kirchengeschichte) の講座はあるが、修道院の講座と云ふ事は未だ聞いた事がない。而して教會史とは稱するが、其所謂教會史の取扱ふ問題を觀るに、頗る廣汎であつて、決して教會の歴史のみを論じて居るのではなく、實際は教會史の名義の下に基督教全體に涉つて凡ての事を論ずるやうになつて居る。即ち教會史の範圍内には法王制度や監督制度を論ずるは勿論の事であるが、進んでスコラ哲學の事も論ずれば、修道院までも其中に論じて居る。教會史の名義の下に斯く廣汎の事柄を論ずるの當否如何は兎に角に今之を批判するの必要もないけれども、之に依りて極めて判明であるは普通一般の理解する所に據れば基督教を代表せしむべき制度は教會であると云ふ事である。隨て基督教の花形役者たる教會の性質は何人にも比較的能く了解されて居ると云へやうが、之に反して修道院の方は餘り理解されて居らぬ。殊に基督教をプロテスタント教によりて代表すべきものゝ如くに考へて居る人々には修道院の事は了解されて居らぬのである。是は無理もないが、決して基督教の全景を描くべき最良の方法ではない。基督教會を以て

基督教を代表せしむるは固より不可ならざれど、是のみにては修道院の事などは餘程不完全にしか従て不満足なるやうにしか描き得ぬ場合がある。予輩は少し極端なる考を懷いて居るやうに思はれやうが、時としては修道院を以て基督教を代表せしめ得ぬ事もあるまいと思ふのである。蓋し修道院の宗教思想には永遠の價値を包藏して居ると判じても然るべき主張があると思ふからである。修道院の懐ける宗教思想には常に一時代一方處に於て行はれたりし思想のみならず、洵とに何處の人間にも訴へ得べき、人類に共通なる宗教的要求が暗示されて居るのである。基督教と佛教とは長い歴史を有して居るから、兩者間には差別點の著しく存して居ると思はるゝのは無理もないが、之と同時に兩者間に類似點の著しく存する事も否むべきではない。而して基督教の最も佛教に類似して居る點より云へば、蓋し修道院程に著しい處は他にあるまいと思ふ。

基督教修道院の宗教思想を論ずるに當りて注意せねばならぬ事は修道院の歴史の頗る長い事である。修道院は第三世紀の終り頃に創設せられたのであるが、今も尙ほ存在して居るのである。勿論プロテスタント教の方には全く存在して居らな  
いが、羅馬加持力(公)教と希臘正教とは今も多くの修道院が存在して居るのであつ

て、勿論教會程の勢力は無いけれども、教會以外に於ける基督教の勢力と云へば、今日と雖ども羅馬加特力教と希臘正教との間に修道院に肩を比し得べき者は一もあるまいと思ふ。修道院の歴史は斯くも長いのであるから、其間に多くの變遷のあつた事は云ふまでもない。従て宗教思想上に於ても變化のあつた事は明である。此に於て生じて來る問題は斯くも變遷多き宗教思想中に特に修道院の宗教思想と銘を打つて論述し得る程の、一貫せる統一的思想があるかと云ふ事である。成る程吾人は修道院の始まりし頃に著しかりし宗教思想と宗教改革時代に起りし修道院例へばエズイト(Jesuit)派を支配したりし宗教思想とを比較せば、兩者間には雲泥も管ならざる程の相違あるに注意せざるを得ぬ。即ち修道院の初發期に於ては修道僧は世より遠からんとしたりしに、中世の末期と近世の初期になれば修道僧は親ら俗世に混入して之を教化せんとして居る。初期の埃及時代に於ては個人の獨立を重んじたりし爲めに孤獨的なりし者が、ドミニック派やエズイト派になれば、法王に事ふること恰も家臣の獨裁君主に事ふるが如く、個人の自由や獨立は毛頭之を念慮に留めぬ事になり、異端制伐を何よりも尊い事として、個人の思想の自由を蹂躪するに浮身を窶す有様と成り果てたのである。確かに結果に依りて之を判ずれば、修道院の制

度にも亦思想にも始と終とは甚だしい逕庭がある。然らば修道院には之を一貫したる宗教思想が絶えてないかと云ふに、決して左様の事はないと思ふ。一體如何なる人間の團體でも一千年以上も連続せば其組織や思想に何等の變化もないと云ふ事はない。最初の理想は單に理論上の想念としてのみ判断せらるゝ間は元のまゝで變化なしに存續して居るけれども、修道院の如く思想の運用其者よりも理想を實生活に實施するを以て夫が存在の理由の主眼とする團體にありては、之を實施せんとする度毎に種々の障礙に遭ふのが常である。従て曩に唱へたりし主張に多少の變容を爲さしむべき必要に迫らるゝのである。故に修道院の始めと其終りとに於ては著しい相違があるけれども、吾人若し如何なる史的事情が存在して斯る變化の生ずるのを餘儀なくせしめたかを知るを得ば、修道院の根本の思想を明にする事が容易であると思ふ。

是より極めて簡短に修道院の變化の大綱を述べやうと思ふ。基督教の修道院の歴史には變革時期が五個程あつたと云へやうと思ふ。即ち

第一期 埃及スリヤ時代

第二期 ペネデクト時代

## 第三期 クルニ―時代

## 第四期 托鉢僧團流行時代

## 第五期 エズイト派時代 である。

## 第一期 埃及スリヤ時代

基督教史上に於て修道院の創設せられたる國土の埃及なることは史家の一樣に承認する所である。而して其創設者のアントニ―(Anthony)である事も一般に認められて居る。此人は多分二百五十年頃に生れ、三百五十六年頃に死んだので、百歳以上の長壽を保つたと云はれて居る。彼は元來富有の家に生れたれども、痛く塵世の無常に撃たれて世を避け、神と交はらんと決し、遂に莫大の財産を悉く窮民に施し、一人の妹のあつたのは之を友人に委托して、南埃及の原野に隱遁し、孤獨の生活を營み、日夕神と交はらんが爲めに瞑想に耽り、祈禱を常とし、聖書を讀み、自然を友としたのであつた。彼は又神と交はらんが爲めには、婦人は何よりも誘惑と成り易いと云ふので、絶對的に婦人に近くを禁物とした。一體基督教に於ては道に進む者は世より遠からねばならぬとの思想は、第二世紀の初め頃より著しく存して居つた者であつた。例へば約翰福音書には世(Kóσμος)を基督教に反對せしめて論じて居るが、是は「世」の代

表者たる羅馬帝國の迫害が基督教に加へらるゝに及んで一層激烈と成つたやうであるが修道僧等は皆な世を以て悪魔の支配する處であると考へ之を避け之を棄てんと努力したのであるが埃及時代の修道僧は此の棄つべき輕侮に値する「世」の中に於て婦人が其要位を占めて居ると觀て居つたのである。故に彼等が世を棄つると云ふ時は婦人を世の中に包含せしめて云つて居るのである。然り彼等が世を棄つるに於て最も努力精進すべしと思ふたのは世の中の主要部に位する所の婦人を棄つる事であつた。是はアントニイに著しく見ゆるのみならず修道院全體に著しい事である。アントニイは性慾を禁止する事に努力すると同時に飲食、睡眠、衣服、家屋、談話等に至るまでも甚だしく之を制限したのである。彼が飲食物の量を制限し、亦飲食物の種類をも成るべく僅少に限る事としたのは要するに性慾を弱からしめんとする一の手段であつたのである。斯くて彼は極めて質素にして文化生活と縁遠き生活を爲し、孤獨生活を岩窟内に營み、以て社交生活を斷つたのである。彼の目的は窮極する所世を離れ、人を避け、文明を斥け、富を厭ふと云ふ其一事に止るのではない。彼は斯の如き消極的修養法によりて結局神に親まんと目的を成就し得べしと信じたのである。然るにアントニイの風を欽仰して其弟子となる者が随分多か

つたので、彼は自ら冀ふ所の孤獨的生活に多少の緩和策を施こして、土曜日と日曜日  
 には數名の聖徒相會して、聖書朗讀、祈禱讚美等を爲したのである。而して是以外  
 には彼は何人とも交はらず、全く孤獨的生活を爲し、彼の隨喜者にも同様の生活法を  
 勧めたのである。そこで最初埃及に起りし修道僧の間には何時死せしやら長い  
 間誰にも知れなかつた人もあつたと云ふ事である。斯る有様では多くの人は到底  
 寂寥の念に堪えられぬのである。殊に婦人にして修道に志す者に取りては、孤獨で  
 野獸の横行濶歩する野原や岩窟に住むと云ふ事は能くすべきでない。そこでアン  
 トニイ式の修道法は變じて團體生活を爲す形式に改めらるゝに至つたのである。

孤獨的修道法(*Penitential or anchoritic monasticism*)を變じて團體的(*Cenobitical*)修道法に  
 改めたのはパコミウス(*Pachomius*)である。彼は二百九十二年頃に生れ、三百四十六年  
 頃に死んだ人であるが故に、アントニイと同時代であるが、修道法に就てはアントニ  
 イが彼よりも先輩である。彼は曾て軍隊生活を爲したりし關係からでもあらうが、  
 アントニイのやうな孤獨的生活を營みて居るのでは、萬事消極的であつて、普通人に  
 は修道法として宜しきを得た者であるとは思はなかつたので、遂に團體的修道法を  
 創始し、以て軍隊的訓練を修道法に加味するに至つたのである。彼は作業と慈善と



の重んずべきを説き修道院志願者等を其職業によりて分類し、一組を四十人程と定め、之を一屋の内に收めて、皆な其職業に精勵せしめた。而して製作せる手工品は之を市場に鬻ぎて得たる収益を以て、一は自己の生活費と修道院の維持費とに充て、殘餘の分は之を慈善事業の爲めに用ゆる事と爲したのである。固より埃及のやうに溫暖なる國土に修道院を創建したのであるから、衣食の資を得る爲めには敢て激烈なる勞役に服する必要はない。そこで閑暇は十二分にある。バコミウスは此の時間を悉く神と交はる爲めに用ゆる事を獎勵したのである。是はアントニの修道法に比して遙かに實行し易くもあるし、且つ効果もあつたのである。そこで團體的修道法は遂に埃及に於て高評を博し、バコミウスの指揮の下に修道生活を爲さんとする有志家の數が著しく増加し、遂に其志道者中には婦人も現はるゝ事となりたれば、バコミウスは婦人の爲めにも寄宿舎式の修道院を造りて、此に始めて尼の生活が始め得らるゝやうになつたのである。是は婦人を以て修道法の禁制としたりし修道院の一部に、縦ひ男子部とは全然隔離したのではあるにしても、婦人を收容する事は修道院の主義に背馳するが如くにも見ゆるけれども、元來漸次官僚式に制度化せんとしたりし加持力教會の監督制度に反對したりし民主的の修道院の事であるか

ら、男子を容れて獨り女子のみを拒む事は出来なかつたのである。云ふまでもなく初代の基督教は極めて民主的であつて、平等論を押し立て、進んだものである。彼の第二世紀に猛烈に行はれたりしモンタヌス(montanus)派の如きは其適例であると観るべきもので、プリスキラとマクセミラと云ふ二人の婦人豫言者は始終モンタヌスを助け、彼が企てたりし凡ての計畫に参加したのである。加持力教會はモンタヌス派を餘り民主的であつて之では教會の公安と秩序とが維持されぬと云ふ廉て、之を異端と決定したのであつたが、官僚的監督政治を嫌へる修道院に於て女子を其院内に收容したのは是は民主主義の結果であつて當然の處置である。勿論修道院内に於ては男子と女子とは絶對的に直接の交際は禁じられたのである。されば此頃よりは少しく後の事でもあるけれども、拉典基督教の大聖アウグステヌス(三百五十四年生、四百三十年死す)の如きは自ら修道僧たりし人であるが、後ち痛く衆人の崇敬を受け、監督の榮位に就きたりし高德の身にてありながら、立合人を置かなければ、己が妹と談話する無邪氣の樂みすら之を恣にせなかつたとの事である。兎に角に野原の岩窟住居が不可能で、寄宿舎生活が始められ、職業が獎勵せられ、女子までも修道院内に收容せられ得る段までに變化したる修道院は確かに孤獨的生活の成

立し難きを證明した者であると観ねばならぬ。

バコミウスの團體的修道法は當時宗教家の憧憬する所と能く吻合したので、此方は埃及に流行せるのみならず、廣く猶太及びスリヤに行はるゝに至つたのである。而してバコミウスの精神を汲みて之を大成した人はカイザリヤの監督バセライオス(Basil)三百二十九年生、三百七十九年死である。彼は世に所謂バセライオス派の修道法を産むに至れる最大權威である。彼は三百五十六年にカバドキア州のイリス河畔に一の修道院を建立し、此院内に來るべき志道者の爲めに聖書に基きて種々の規則を案出した。彼の之を立案するや主として修道僧の自己修養を爲すを目的としたので、院内管理の事に就ては格別焦慮する所はなかつた。故に彼の修道法には政治的若くは管理的の意義はない。彼は大體に於ては在來のバコミウスの習慣を尊重して修道院内に同居する僧尼の食事、作業、禮拜等を考慮したので、是には格別の事はないが、最も注意すべきは獨身、清貧、從順の徳の尊重すべきを説けるに加へて、家庭的氣風と民主的精神とを鼓吹した事である。一體家庭と民主的精神とは何處に於ても能く一致する者であると思はれるが、バセライオスの修道院に於て此二個の精神氣風が漂ふて居る。修道院内の家庭的氣風は修道院長を呼ぶにAbbotを以てす

る事よりも之を察すべきである。アポトはスリヤ語の父と云ふ語の轉訛した者である。又修道院に民主主義の著しいことは院内に階級の全く存在せぬ事實に徴して之を知るべきである。修道院に於ては從順の徳を説き、院長の命を奉ずべきを勸むれども、院長は元來は修道僧の選舉によりて定まるのである。故に修道院の從順は其實修道僧自ら自己の意志に従ふが如き姿になつて居るのである。

東部の修道院は多くバセライオスの修道法を採用したのであつて今日に至るまで彼の修道院は希臘教會即ちスリヤ、埃及、露西亞、猶太等に散在せる修道院の模範となつて居るのである。東部に於ては第五世紀以來修道院の組織には變化はないのであるから、何れもバセライオス式であると云はねばならぬ。唯此所に洩るゝと思はるゝはシナイ山の修道院のみである。是はアントニの古法を守つて居ると云はれて居る。埃及式の修道院中には随分亂暴なる難行苦行を爲すを誇りとした者もあつたが、バセライオス式の修道法は餘程穩健になつて來て居る。彼の時代には修道僧は勿論皆な獨身であつて、獸肉を食ふ事は之を禁じられたが、葡萄酒を飲む事は臨機應變で、或は之を禁じたり、或は之を自由にしたり、致したのであるが、彼等は時々斷食を勵行した。平素は野菜と果實を食して之に安んじ、祭日には魚肉、鶏卵、牛乳

牛酪等を食するの自由を得る鹽梅であつた。而して自身の生活を維持するに必要なる手工を爲し、財産の餘分は之を貧者に施與し、常に一定の簡單質素なる衣服を纏ふて居たのである。而して積極的の業と云へば、聖書を朗讀し、祈禱を爲し、讚美歌を誦し、進んでは瞑想到に耽り、神と交はらん事に専念するのであつた。修道僧は之よりも一段奮發して世と交はる事はしないけれども、修道院内に同志の中間が多く群居するのであつたから、彼等が喜憂を共にし、互に獎勵慰安を爲すの道が備はつて居たのである。そこで修道院の生活は之を埃及時代の峻嚴にして乾燥なるに比すれば、餘程人間の娑婆らしくなつて來たのである。且つ埃及時代に於ては修道院の所在地は原野や岩窟や山林などであつたが、時の經過するに隨ひ、修道院は漸次都會に建立せらるゝに至つた、即ちコンスタンヌス大帝二百七十二年生三百三十七年死はコンスタンチノポリス市中に修道院を建立したのであつたが、其後帝王貴族にして修道院を寄進する者が多くなり、大帝治世の晩年には同市に修道院が十五寺あつたとの事である、而して五百十八年には五十四寺あつたと云はれて居る、以て第四、第五世紀頃に修道院の如何に盛大にありしかを推定するに足るであらうと思ふ。實に第四世紀より第六世紀頃までは東部に於ける希臘教内の著名の士は多く修道僧

になつたか、又は修道僧たらんと志した者のみであると云へる程である。當時人生を評價して聖俗、高下の二級に區別するやうになり、普通人の生活を以て凡俗にして下等なりと斷じ、修道僧の生活を以て神聖にして高等の生活なりとし、唯少數の優秀者のみ此榮譽に與かり神に奉事するを能くすべしと判斷せられたのである。故に神聖なる修道僧尼たらん事は、當事信仰ある者の均しく欽仰敬慕したりし標的であつた。

### 第二期 ベネデクト(Benedict)時代

西部の羅馬やゴール地方に修道院の輸入せられたのは、餘程昔の事である。アレキサンドリアのアサナシウス(Athanasius)が羅馬に到りて大にアントニオの事を稱讚したのは、三百四十年頃である。又マルチン(St. Martin)がポアテール(Poitiers)附近に修道院を建立したのは、三百六十二年頃の事である。カシアヌス(Cassianus)がマルセイユに修道院を建立したのは、第五世紀の事であらう。されど是等は、孰れもアントニオに則りたる者であつて、何も格別の事がない。然るに第六世紀になりて羅馬帝國の瓦解して以來、間もなき頃に、修道院史上に於て時代を劃すべき偉勳を奏した人がある。是は伊太利のナルシヤ(Narsia)のベネデクト(Benedict)四百八十年生、五百四十三年死である。彼の修道院に對する貢獻は、世に所謂ベネデクト法(Benedictine Rule)

なる者を彼自ら起草したか、若くは此法を起草するに至れる最大の源因であること云ふ事に存するのである。彼が果して之を起草したりしや否や、之には稍々不明の點はあれど、縦ひ彼親ら之を起草せざりしとするも、彼の精神が此ベネデクト法に現はれたるや疑ふべき餘地はない。蓋し傳説の主張するが如く、彼は五百三十年頃モン・カセノ(monte Cassino)修道院に於て之を草案したのであらう。兎に角に此のベネデクト法は歐洲西北部に位する諸國の修道院の典型となつたものである。故に是は最も鄭重なる考慮を受くべき價値があるのである。

ベネデクト法は七十三章より成つて居るので、院長の義務を論ずるもの九章神の禮拜に關するもの十三章、訓練と刑法とに關するもの二十九章、修道院の内政管理に關するもの十章、雜則十二章になつて居る。吾人は之を通讀するに之をバセライオス法に比すれば更に一段の進歩を示して居るのに注意せざるを得ぬのである。バセライオス法にては修道院管理の事は之を眼中に置かなかつたが、此は鄭重に之を考慮して居る。且つバセライオス法よりも修道僧の修養に就きて遙かに常識に適ひ、歐洲西北部の地理と氣候とに能く順應し洵とに都合善く出來て居る。例へばベネデクト法は修道僧に十分の食物を供給して居る。即ち一日に二食二皿といふ事

に定め、更にバンは一封度を與へ、酒は一日に半バイント(我二合弱)を給する事とした。是は北歐の如き寒き地方にては多く食せずば、生活に困難なるのみならず、亦多く作業を營ましめん爲めには多くの食物を要するからである。ベネデクトは其上病弱の者には肉食するをも之を禁じないし、食物の種類も院長の意志にて之を便宜に變更せしめ得るやうに融通の利く事に定めた。彼は又睡眠は一日六時間乃至八時間爲すべき事と定め、更に夏期中には晝眠(Siesta)をすら爲すを認めたのである。其上衣服や寢具に就ても埃及時代の如く貧弱ではなくして、之を中世の歐洲農民の一般に用ゐたりした所に比しても決して劣つて居らぬと云はれて居る。其代はり彼は修道僧に怠惰を誡め、一日に少なくとも労働時間の合計五時間以内に短縮せしむべからざる事を定めたのである。其上彼は労働の外更に讀書及び學問を奨励したのである。故に「ベネデクト式の博學」(Benedictine erudition)と云ふ名句すら出つるに至つた程である。彼は乞食する事と流浪する事とを痛く厭ふたのであつたから、勢ひ労働を奨励せねばならなかつたのである。隨てベネデクト派より種々の業務が發達するに至つた。今其の主要なる者を擧ぐれば先づ祈禱、禮拜、讚美、冥想等は別として之を措くとするも、手工、農業、寫本、育兒、教育、建築、著述、蠻民教化等は最も注目すべき者で



あらう。埃及時代に於ては修道僧は労働を最小限度に短縮せんとする風があつたが、ベネデクトは修道僧をして成るべく長く且つ有効に労働せしめんと勧めた。埃及時代には修道僧は世より遠からんとしたが、ベネデクト時代になると世と交はらうと云ふ程にはなつて居らないが、蠻民を教化し、又子供等も場合によりては之を教養せねばならぬと云ふまでに感ずるに至つた。曩には修道僧は世と戦へば敗北するやも測り知れぬとの憂慮ありしが故に、修道僧は成るべく世に接觸せずして、之より遠からんと努めたが今や世に負けぬと云ふ信念が幾分か生じて來たものと見え世を教化せねばならぬと感ずるに至つたのである。されどベネデクト法に就ても吾人の注意すべき點は修道僧が己の所屬修道院を定めて終生之より絶縁せぬと云ふ固着法 (Stabilitas loci) を主張した事であらう。ベネデクトは之によりて修道僧が處々に徘徊流浪して定る處なき、隨て着實重厚の徳を缺くのを矯めんとしたのである。彼は斯くして更に修道僧をして自己所屬の修道院を愛するの精神を養ひ且つ之に對する責任の念を養成せしめんとしたのである。此の終生己が所屬の修道院を變更せぬと云ふ事は修道院の歴史に於て重大視すべき意義を有して居る。

以上述べたる所より之を判ずればベネデクト法は極めて常識に富める處置であ

るが斯くも常識的なるベネデクトにありても尙ほ修道院本來の特質を抹殺し得ざりしと思はるゝのは、彼が修道院と世とを成るべく遠距離に置かんと努めた事である。ベネデクトは兩者の交通を遮斷せんと苦心したので、其結果として生ぜる珍奇なる現象は修道僧の時として事情止むを得ざる場合には、修道院以外に出づるを許したけれども、彼が院外に於て見聞せる事は一切歸院後同僚間に之を口外すべからずと命じた事である。随分實行し難い事であつたらうと思はれる。信書の如きも之を院外に出す事も亦自ら院内に受くる事も得るやうに許可を與へたけれども、一々係りの者の檢閲を受くるの要あるやうに定めたのである。修道僧は訪問者に面會するを得れども、之に應接する者は常に一定の人であつて、其人と立合の上に面會すると云ふ風になつて居る。されど吾人は今日之を陸軍幼年學校の寄宿舎の如き者に比較したならば訓練を實行する上に於ける難易の度は格別大差はないかも知れない。兎に角にベネデクト法には會て埃及にありしが如き難行苦行の爲めに無理の修行を積むと云ふ様子は全く消えてしまつたのである。歐洲中古の文明は實にベネデクト法に支配せられたりし修道院に負ふ所が尠少ではなかつたのである。殊に西羅馬帝國が瓦解してより間もなく秩序井然として存立したりしベネデクト

式の修道院が蠻民の上に臨んだのであるから、是は北蠻人間には羅馬の文明と秩序とを教ふる上に於て至大の權威と成つたのである。

### 第三期 クルニイ時代

クルニイ (Cluny) 修道院は佛國に於ける最も著名なりし修道院であつて、アクイティーン (Aquitaine) 公爵ウキリアム (William) が九百十年に創立した者である。此修道院は一千九十八年に創建せられたるシトイ (Cîteaux) 修道院より派出せるセスタルシアン (Cistercian) 派の修道院と並んで中古歐洲の宗教界に至大の功業を樹立したのである。世人は彼を白僧と呼ぶに對して此を黒僧と呼んだが、是は彼等が着用せる衣服の色に基きて云つたのである。兩者共にベネデクト派なれども、セスタルシアン派は農業や深林開拓や蠻民教化等に功を樹て、クルニイ派は修道院の行政管理に偉勳を奏したのである。クルニイ派にて特に注意すべきは教會の監督政治より全然獨立した事である。一體修道院は監督政治の官僚主義に陥る弊のあることが歴然たるより、之に反對したのであつたが、東部に於ては修道院が全く教會の監督の管轄圏内より脱離することは之を能くせなかつた。而して四百五十一年に開かれたりしカルケドン (Chalcedon) 大會に於ては修道院は監督の管理を受くべき者なる事が決議せら

れたのみで、何人も監督の許可なくては、新たに修道院を創設するを禁じられたのであつた。されど本来修道院は教會殊に監督政治の下にある官僚式の教會に厭き足らざる所あるより起りたる者であるから、今更監督が之を己が管轄内に入るゝに成功したからとて、直接修道院を統治する事は實際困難であつたから、格別之に干渉も爲さなかつたが、東部に於ては理論上修道院は監督者の管理に屬し、監督は大監督長 (Tropitian) の統治を受け、大監督は更に大監督長 (Patriarch) の治下であり、最後に大監督長は皇帝の統轄を受けると云ふ事に成つて居つた。然るに西部に於ては中世の初には皇帝の權力は東羅馬帝國に於ける程には強くなかつた。而して羅馬の監督(後の法王)の勢力は莫大であつた。そこで西に於ては羅馬を始め其他の監督は皇帝の管理を受くる必要はなかつたのである。皇帝の制裁をも受けぬと云ふが如き勢力の莫大なりし監督より管理せらるゝと云ふ段になつたならば、修道院は頗る窮窟に感じたに違ひはなかつたらう。そこでクルニ修道院は全然監督の管轄を脱して法王に直隸すと云ふ事に定まつたのである。而して實際は法王もクルニの修道院には格別干渉せぬ事に定めたのである。故に西部に於てクルニ時代以來表向きにも修道院は監督と無關係になつてしまふたのである。是は西部に於てはグレゴ

レ、大法王 (Gregory) 五百九十年より六百四年まで在位) の如き其身修道院出身の人であつて、常に修道院を擁護して之を監督の管理より脱せしめ、次て法王に直隸せしめんと努力したのみならず、其後の法王にして此の政策を繼承したりし者も可なり多自かつたが爲めである。かくて修道院は官僚主義より惱まざるゝことなき自由在の樂天地と成つたのである。更にクルニ、修道院に注目すべきは數多の修道院を統一して中央集權制を實行した事である。一體クルニ、時代までは各地の修道院は皆な獨立自治の團體であつたが、クルニ、修道院は之より派生せる修道院を聯合して組合を作り、クルニ、修道院長が之を總括するのみならず、クルニ、修道院長は其派に屬する各地の修道院長を任免する事に定めたのである。故にクルニ、修道院長は古今絶無とも云ふべき程の強大なる勢力を有せる事を修道院史上に留めて居る。そこでクルニ、修道院長は恰も一の大名か若くは王者の如き權勢赫々たる者となつたのである。

以上述べたるクルニ、修道院の中央集權的政策はクルニ、派以外の修道院には普及するに至らざりしも、修道院が監督の管轄を脱すると云ふ事は西部諸國に於ける修道院の一般に倣ふ所となつたので、其後何處に於ても修道院は羅馬法王に直隸

すると云ふ事になつたのである。そこで官僚主義に反對して世に生れたる修道院は東に於ては其目的を十分に貫徹するを得なかつたけれども、西部に於てはクルニ時代に至りて之を實現したものである。

次に考へねばならぬ事はクルニ時代の如く修道院が勢力を得て來るやうになれば修道院は單に教會や監督の管轄を脱したからとて之で満足する筈はない。此頃よりして修道院の感化が反對の方向に進んで著しく教會に普及するやうになつて來たのである。是は獨身制を教會の教職に在る者に勵行するやうになつたのである。東部に於ては修道院は監督の管轄の下にあるやうになつたけれども、修道院の感化が教會に及んだ事もあるので、教職中の最高位を占むる監督のみは獨身を守らねばならぬ事となつたのであつたが、西部に於ては教職にある者は其位置の高下に論なく、皆な獨身なるべき筈である事は主義としては確定して居つたのである。あつたけれども、實際は獨身を守る教師は其數甚だ少なかつたので、多くは妻帯するか若くは蓄妾して居つたのであつた。高位の監督ですら獨身を守らなかつた者が多い程であつた。彼の法王ハドリアン二世(Adrian II)八百六十七年より八百七十二年まで在位の如きは法王に選ばれるに先ち既に結婚し、娘もあつたので、八百六十八

年には其娘と妻とは、娘の夫に殺害せられた程である。又彼のベネデクト九世(Benedict IX) 一千三十三年より一千四十六年まで在位)は自分の従兄の娘を娶らんとて大騒ぎを演じた程であつた。所がクルニト修道院出身のヒルデブランド(Hildebrand)がグレゴリアス第七世(Gregory VII) 一千七十三年より一千八十五年まで在位)として法王の位に陞るや、獨身制を教師全體に勵行し之を守らざる者を嚴重に處分したのである。是に於て修道院は益々隆盛となり、是までには世を避けて居つたが、是よりは世を教化せねばならぬと云ふ段取となつたのである。

#### 第四期 托鉢僧團流行時代

修道院の法王に直隸するに決定してより以來、修道院長等の方針は益々法王の政策を助けて世を教化せんとする事になつた。是が第十二世紀より第十三世紀に亘りて修道院内より托鉢僧團の起つた理由である。托鉢僧團は云ふまでもなく、伊太利國アシジのフランセス(Francis of Assisi) 一千八百八十二年生、一千二百二十六年死によりて創設せられたフランセス僧團と西班牙のドミニック(Domingo de Guzman) 一千七百十年生、一千二百二十一年死)によりて創設せられたるドミニック僧團とによりて代表せらるべき者である。此外にも托鉢僧團はあるけれども、何れも貧弱であつて云ふ

に足らぬ。托鉢僧團の起りたる表面上の理由は基督も其弟子も貧窮にして財産を所有せなかつたからして、其足跡に則るべき筈の者は清貧ならざるべからずとの精神に存するけれども。單に之のみではない。裏面の理由ではあるけれども、其實表面の理由よりも托鉢僧團を起すに於て一層有力なりし理由は、社會と接觸して世を教化せんとする熱心があつたからの事である。托鉢僧(Mendicant monks Fris)殊にフランセス僧等は説教と慈善の業とに力を盡す事になつた。托鉢を爲せば人間を相手にせぬ譯に行かぬ。隨て托鉢は社交性を養ひ、傳道の助となるのである。一體加持力教會にては教師等は常に儀式を司る事を主として居るので、説教する事を好まぬ傾向があつたのであるが、是は第十三世紀になりてより托鉢僧等の説教と傳道とに熱心なりしが爲めに一時面目を改めたのであつた。托鉢僧等は丁度今日の救世軍の人々のなした如き事業を演じたのである。殊にフランセス派にはフランセスの如き聖者があつたから、當時の社會に及ぼせる徳化は極めて顯著なる者があつた。然るにドミニック派の方では學問を非常に奨励したので、アルバルタス(Albertus Magnus 一千百九十三年頃生、一千二百八十年死)トマス(Thomas Aquinas 一千二百二十五年頃生、一千二百七十四年死)のやうな大學者を出したけれども、此僧團は法王に對して忠誠



を抜んでんとせる熱心よりして遂に自ら極端なる官僚主義を實行する事となり、異端征伐に熱中し、宗教審問所(Inquisition)の大役を勤むる事となつたのである。斯くなり果てゝは修道院設立當時の精神とは全く背馳するやうになつたのである。

#### 第五期 エズイト派時代

エズイト派はルートルの宗教改革以後羅馬加持力教會の方にてプロテスタント教に對抗せんが爲に組織せられた者であると云つて善し。西班牙の人ロヨラ(Ignatius Loyola)一千四百九十一年生、一千五百五十六年死)によりて指導せられて顯著なる活動を演じたのである。此派の特色とする所は獨身、清貧、從順の三個誓約中從順を最も尊重して軍隊的精神を養成し、法王を擁護して其の近衛兵の如くになつて勇しく活動した事である。一體修道院にては本來個人の價値を尊重し、神秘を味ひ、自由を愛したのである。然るに今や道理の有無に拘はらず、法王の命唯之に従ふと云ふやうに成り果てたので、官僚的色彩の最も濃厚なる者となつたのである。故に史家中には之を修道院であると認め人もある位である。序に云つて置くが、織田信長時代に我國に傳道の爲め來朝せるサビエー(Xavier)は此派に屬した人である。エズイト派は修道院の精神を發揮する上に於ては最も意義の淺い者であると云ふべきで

あらう。而して第十六世紀以後になりてより以來は修道院は衰微する一方であるから、其後には格別注意に値ひする程の事はないのである。

以上述べたるが如き史的變遷を経たる修道院の宗教思想は果して如何なる者であらうか。是は推察するに餘り難くはないと思ふが、是より之を述ぶる事と致さう。吾輩の觀る所では修道院の懐ける宗教思想には三個の著しき特徴が現はれて居る。第一は誠律主義で、第二は神秘主義で、第三は個人主義である。是より以上の三特徴に就て説明する事と致さう。

第一、誠律主義 誠律は何れの世に於ても消極的になり易い。即ち何々を爲すべしと勧誘するよりも、何々を爲すべからずと禁止する場合が多くなると思ふ。修道院の主張したる誠律も之と同様であつて、三個の誓約に於て代表的に現はれて居ると云ひやう。三個の誓約とは即ち獨身、清貧、從順である。此外修道院には種々の誠律がある。勿論以上三個の誓約の中にて何れが最も尊重せられしや、時代によりて異なりて居る。埃及スリヤ時代よりクルニ時代に至るまでは獨身が最も高調せられ、托鉢僧團の流行せし時代には清貧が最も高調せられ、最後にエズイト派時代には從順が最も高調せられたのである。高調點は斯の如く時勢の變化せるが爲めに

著しく移動して居るけれども、何れも誠律を守るを以て修道の指南となした事は明である。以上三個の誓約は何れも其精神に於て消極的ならざるはない。即ち何れも皆な進んで取れと云ふに非ずして、退いて避けよと云ふのである。獨身は云ふまでもなく異性たる婦人を棄てよと云ふのである。清貧は財産を棄てよと命じ、從順は自我を棄て、修道院長に従へよと云ふのである。勿論修道院長の命令を神の命令と心得て之に従へよと云ふのであるから、間接には從順は神に従ふ事にはなるやうなものの。實際は修道院長の命令には我意我慾を棄て、無條件的に服従せよと云ふのである。然るに愛情は人間固有の情であり、家庭は萬人の欲する所である。財産は生活上の安全を保證し、物質上の便宜を約束するものであつて、禽獸同様の生活を爲さざる限り、衆人之を求めて止まぬ。我意我慾は個人の中堅を爲すものであつて、其人の靈魂も同様であるが如くに感ずるは人の常である。然るに修道院は人情の能くし難き所を撃ちて之を捕虜と爲し、之を破滅せんとまで奮闘せんことを命じた。其の此に到れる動機果して如何。吾人は之を考ふれば修道院の懐ける人生觀及び宗教思想の何たるやを推すに難くないと思ふ。

一體制慾的思想(Asceticism)はイエスにあつたか否かは別問題として問ふ必要もあ

るまいが、是は確かにパウロ時代より基督教の内部に存して居つた。イエスは甦生後の状態を説明するに當りて之を天使の状態に比し、之を以て、それ甦る時は娶らず嫁ず天にある神の使等の如し(馬太二二二)と云へるを當時の信徒等は解して獨身は婚姻生活よりも高尚にして靈的状态の特徴なりと悟り、第一世紀の終頃より獨身と殉教とを以て特別の功德ある者であると評價したのであつた。故に制慾的思想は知識派(Gnosticism)にも權現論者(Docetism)にもマルキオン(Marcion)にもモンタヌス派(Montanism)にもノヴァンヌス派(Novatianism)にもドナトゥス派(Donatus)にも著しく存して居つたのである。就中マルキオンの如きは極端であつて、單に教師に婚姻を嚴禁するを以て安んぜず、一般の俗人に對してまでも之を禁じたのであつた。世人が斯くせば三四十年以後には人類の絶滅すべきを嘆息すれば、マルキオンは斯なれば萬人肉を去りて靈に還るのであるから至極結構であると考へて居つた程である。以上列擧したる諸派は何れも基督教會に在りては異端と決せられた者であるから、讀者諸君には此諸派の制慾的思想は以て基督教の大勢を示すに足らぬとの疑惑も起らぬとも限まいが、吾人の考へねばならぬ事は以上諸派は異端と判ぜられたけれども、其の異端なりと判ぜられたのは彼等が制慾説を唱へたから然るのではなくし

て、寧ろ極端なる民主主義を唱へたり、或は教會政治に就て意見の衝突を來たしたりしたが、爲め異端とせられたのである。制慾的思想は教會より異端と思れざりし大家にも著しく存して居つた。例令オリゲネース(百八十五年頃生二百五十四年頃死)の如きは彼がアレキサンドリヤに於て神學校長たりし頃には、何人も彼を異端であるなどは想はざりしが、彼は自己の講義を聽く者の中には婦人も居るので、誘惑に成り易と云ふので、自ら去勢した程制慾勵行者であつた。亦彼のアウゲステヌスにしても同様で彼が奉教以前に遊蕩せるを痛恨して奉教後亞非利加に歸りて直に修道僧となりしが如き、當時一般に制慾的思想を以て最も聖者の状態に適したものであると考へて居つた事を示すに足るであらう。されど制慾的思想のみでは修道院は起らない。若し制慾的思想のみで修道院が起るものとせば、第二世紀に於て既に之が成立する筈であるのに、修道院は第三世紀の末か第四世紀の始までは起らなかつた。然らば制慾的思想以外に修道院を起さしめたる原因は何であつたらうか。

世を厭ふと云ふ思想と世の終りが近づいたと云ふ考も大に修道院の設立の原因を助長せしめたのであらうと思ふ。世を厭ふと云ふ考は基督教徒が羅馬帝國政府より偶像禮拜を強迫せられて其迫害に忍耐し得ざる程に感じたりし時に、益々激烈

となつて來たやうである。皇帝を神として之を禮拜するを厭ふた基督教徒の多くは羅馬帝國の公けの儀式に參與する事には自然と遠かる事となり、隨て國家の官吏とは成り得ざる有様となり、事實に於て政府や官憲と無關係になり、易いから、遂に何となく世より遠かる事にもなつたのである。然らば修道院は斯る動機より促進せられたのであらうか。蓋しさうではない。何となれば修道院は帝國の迫害の隆なりし時に起らずして、帝國が基督教徒を迫害する事を止めた時に起つたからである。世の末期が近かづけりとの思想は基督の時代には一般に猶太にも羅馬にも存在して居つたのである。是も基督教徒をして勿論世の輕んずべきを痛切に感ぜしめたには違ひはないが、此思想が修道院を起したとは云へぬと思ふ。何となれば修道院の發生せし東部に於ては世末觀 (eschatological View of the world) は第三世紀に其勢力を消耗してしまつたからである。而して修道院は世末觀が終熄して後に起つたからである。

勿論制慾論、厭世觀、帝國の迫害、世末觀等は何れも修道僧の人生觀を構成するに於て多大の助力を爲した者であるに違ひはない。されど是等諸説の單獨の働き若くは協同の働きのみでは、到底修道院は起なかつたと思ふ。之を起さしめたる主因は

洵とに基督教會が羅馬帝國と接觸して其監督等が俗權に媚び、而して教會が益々官僚的になりたるが爲めに深奥なる宗教思想を懐ける君子人は之に憤慨して遂に世を避けて修道院を起さんと奮發蹶起したのである。

元來基督時代に於ける基督教は一の經典もなければ、制度もなく、信條もなき極めて自由自在の團體より成つた者であつた。其教徒は神の靈の感動を受け、自己の良心の命ずる所に従ふて何にても之を行ふと云ふ工合であつて、極めて、デモクラチックなもの、之を束縛すべき何等の外權も存在して居らなかつた。そこで時々は餘り自由になり過ぎたりしこととして、秩序を紊す憂はあつたが、少しも官僚的の弊の如きは之を見出し得なかつた。されど基督教が世を教化せんとする、努力が益々優勢となり之が社會と交渉するに至りて堅固なる團體を形成するの必要を感じ、之を運用するに於て行政機關の整頓せるものを要する點より、遂に基督教と基督教會とは同一視せらるゝ事と成り、更にカリクスタス(Calinus)二百十九年より二百二十三年まで羅馬の監督の頃より監督が教會を組織する者であつて、一般の信徒は、之を形成するのではなく、信徒の教會に入るを許否するの權は一に監督の權内にある事に確定したのみならず、監督の承認したる人によりて司とられざる聖奠は一切救に無効で

あると云ふ事になり、監督の支配する教會は救濟專賣局の如き姿となり、監督の定めたる儀式を守らざる者や又は監督の許可せざる司式者は孰れも神の恩寵を受くるを得ずとの大膽にして亂暴極まる背理の制度が全能力を有するに至りければ、民主思想を懐ける志ある者は監督政治の器械的にして專横なるに反對するに至つたのである。而して此監督專制政治は遂に第四世紀の初に於てコンスタンヌース大帝が基督教に歸依して之を羅馬帝國の國教と爲してより以來、基督教の代表者たりし監督と政權とは益々接近して來たつたので、爾來教權と俗權とは益々纏綿して、宗教家は宛然政治家の如く成り果つるの弊を醸すに至つた。そこで高遠の神を憧憬し、深奥の宗教的情操を満足せんと熱中せるものは、監督と教會とに望を絶ち、世を避けて修道院を建立せんとしたのである。修道僧は世を棄てたとは云ふけれども、本來は物質界や政治界其者を厭ふたと云ふよりも、宗教家が俗化するを厭ふたのである。是は修道院に於て古より最も禁物と爲たのが婦人と監督とにありしを觀ても明かに判かるのである。ダマスコのモハネ (Johannes Damascenus 第八世紀の希臘神學の大家) の述作中には痛く婦人を卑めて、婦人の善き者にては男子の惡き者よりは、惡しなどと云つた事もある。然らば婦人は元來惡むべきかと云ふに、修道僧は何人も婦人



嫌惡せぬのである。故に婦人を修道院に入れる事も之を許したのである。然るに監督に對しては彼等は之を惡んだのである。或は敎權を弄し、金權と政權とに媚びる策士俗物として、將た壓制家、淺薄なる形式家として之を卑んだのである。故に修道僧の敵は婦人に非ずして寧ろ監督に存したのである。そこで吾人は修道院の起るに就て至大の原因となつた者は實に監督政治と政權との接觸であると云はねばならぬ。そこで修道院の起るのには第三世紀の未まで年月を要したのであると思ふ。

若し修道院に於て官僚主義を厭ふのならば、監督を排するよりも寧ろ羅馬法王に抗するのが至當であると思はるゝのに、何故修道僧等が法王に反對せぬかとの疑問が起るであらう。是は修道院が始めて埃及に起つたのと、今一つは修道院が羅馬に於て法王制の未だ定まらぬ頃に起つたからである。東に於ては凡ての監督を總轄する者は皇帝以外には誰も無い。故に官僚式の教會の行政に抗せんとせば、勢ひ監督に衝る事となる。其上羅馬の監督の勢力が第四世紀に於ては未だ東部に及ぶまでに擴大せぬのは無論の事、西部に於てすら其勢力が一般に諸教會内に浸潤して居らなかつた。故に東部に起れる修道院が何も法王に反抗すべき必要はないのであ

る。其上羅馬法王はグレゴリ一第一世以來修道院を擁護して之を監督の管轄より引き放なして法王の直轄と爲したのである。而して實際は自らも餘り修道院の内政に干渉せなかつたのである。斯の如き史的事情あるが故に、修道院は官僚主義を厭ひたれども、官僚主義の權化たる法王とは互に睦じき奇觀を示して居るのである。監督は教會に根柢を据えたのに、修道僧は原野に走つた。監督は金力を恃みたりしが、修道僧は清貧を樂んだ。監督は人事の末に齷齪したりしに、修道僧は超然として神と親交を得んとて精進したのである。監督は輪奐の美を極めたる殿堂を建立したが、修道僧は岩窟を道場と選び、己が靈臺を祈禱と瞑想とを以て築かんと決心したのである。

されど若し修道僧が自力の全能を信ずる事が出來て、監督と世とを教化し得べしと信じたならば、敢て世を棄てる必要はなかつたであらうが、彼等には其程の自信力はなかつた。故に此世を無常の幻影であると看做し、惡魔の管轄區であると斷じ、世を棄てたのである。隨て消極的の誠律主義を以て人生觀を構成するに至つたのである。されば第四世紀の頃世に勝てぬと思へる修道僧は教會を棄て山野に逃れたれども、第十三世紀に至りて世に勝てるとの自信力を懷ける托鉢僧等は世を教化せ

んとて市中を巡回し、今日の所謂社會救濟の事業に勞苦するを厭はなかつたのである。

第二、神秘主義　修道僧は誠律を嚴守せんと努力したのであるが、さりとて誠律を守る事其自身が彼等の終極の目的ではない。彼等が世を避けんことは之を努めたれども是とて直接最後の目的ではない。嚴重なる節制や訓練は皆な至高目的に到達すべき爲めの一手段に過ぎぬ。彼等は誠律を守り、世を棄て、峻嚴なる訓練を経て、神と親交を完ふせんとしたのである。節制は愛に到るべき一階段であり、神と冥合して恍惚の神境に入るべき門である。故に消極的の誠律主義は、茲に一轉して積極的の神秘主義に入らねばならぬ。修道院によりて神秘思想の鼓吹せられたるは實に驚くべき程に著しい。基督教の神秘論者は多く修道院に關係のあつた人々である。アウグステヌスやルートルの如き時代を劃したりし大宗敎家の事は云はずとも善いが、バルナルド (Clairvaux) の Bernard 一千九十一年生、一千百五十二年死) の如き、サンヴキクトルのフイゴ (Hugo of St. Victor 一千九十七年頃生、一千百四十一年死) の如き、アンセルムス (Anselmus 一千三十三年生、一千百九年死) の如き、皆な修道院出の人である。又彼のヨハネス・スコタス・エリゲナ (Johannes Scotus Erigena 八百十五年頃生) の

如きは、實に深奥なる神秘思想を説いた人であるが、表向きには何處の修道院にも屬して居らなかつたかも知れぬが彼の生活状態より判ずれば修道僧級の人であつた。其他エクハルト("Meiser" Eckhart 一千二百六十年生、一千三百二十七年死)の如き、タウラバ(Johannes Tauler 一千三百六十一年死)の如き、スン(Henry Suso 一千三百六十六年死)の如き、何れもドミニック派の人である。フランセス僧團は殊に神秘家を多く出した。アシシのフランセスは勿論の事であるが、ボナベンチエーラ(Bonaventura 實名は Johannes Gitanza 一千二百二十一年生、一千二百七十四年死)の如き、ダンヌヌタス(John Duns Scotus 一千二百六十年頃生、一千三百八年死す)の如き、又オカツト(William Occam 一千二百八十年頃生、一千三百四十九年頃死)の如きは皆なフランセス僧團に屬して居つたのである。假りに此等の神秘家を基督教より削除し見よ。基督教が如何に貧弱にして淺薄なるか、洵とに驚かざるを得ぬであらう。此等の神秘家なき基督教は恰も墓地の如きものであらう。形式的の墓碑は如何に立派であつても、畢竟ずるに死せる岩石に過ぎぬのである。而して修道僧の理想は實に消極的の誠律主義を去りて積極的の神秘主義に入らんとするにあつた。然らば神秘主義の眞髓は果して何であるか、吾人は之を問はざるを得ぬ。

予輩は今此短き文に於て神秘主義其者を論ぜんとする企を爲すのではないが唯自己の信ずる所によりて結論のみを述べれば、神秘論の眞髓は個人が永遠無窮の價値たる神を直覺的に自感自得すと云ふ事に存すると思ふ。予輩は不幸にして今之を説明するの餘白を有して居らぬされど是は神秘論の中心的思想であると看做して大過なかるべしと思ふ。神秘論者は何時も外的媒介を須ゐずして直覺的に神に親交し得べしと信ずるのである。然るに官僚式の監督政治は個人と神との交りには監督及び監督の司とる聖奠に従はざれば個人は直接神の恩寵を受け得られないと論じた。修道僧は斯る手續を要せず、子たる人間が父たる神に一足飛びに親交し得ると直覺的に判断したのである。故に修道僧は皆な制度と權力とを媒介とする監督政治に反抗したのである。故に最初の修道僧は何れも平信徒であつて教職には就かなかつたのである。然り彼等は衷心に於て教會の儀式を司とるを欲せなかつた。彼等は世捨人であつたけれども、宗教を職として之に衣食したのではなかつた。勿論後になりては、例へば第十二世紀頃になれば修道僧にして教職に就いた者の數が夥しくなつたけれども、是は主として世を教化せんとして或は蠻民に或は貧民に傳道するに至りてより、便宜上教職に就いたまでの事であつて、彼等が本來の素志

に基いたのではなかつた。是は彼等が暫時臨機應變の處置を取つたに過ぎぬのである。そこで修道僧が縦ひ教職に就いても何時も教職中に在りて中位を占むる長老にはなつたが、最高級に位する監督の職と權能とを有したりし者は修道院史上僅かにクルニ―修道院長のみでなからうかと思はれる。以て修道僧が幾何許り神人間の交通に官僚式の手續や媒介の嫌ふべきを痛く感じ、何處までも民主的たらんと苦心せるかを觀るべきである。

修道僧は個人が神を自感自得し得ると信じたりし故に監督制度の神と人との中間に介在するを厭ふたと同様に、亦論理上の媒介をも之を斥けたのである。彼等の所謂直覺や啓蒙(Illumination)や悟り(Intelligence)は感情を削除せる論理的作用を指すものではない。彼等の直覺は敢て智力に反するにあらざるも、論理學數學的の冷靜なる知識に非ずして、心に味ひ得る靈覺である。恰も美を樂み明月を賞する時の如き無我の趣味である。

修道院の生活には此の如き積極的高尙なる神秘主義が宿つて居つた。故に多く高邁脱俗の聖者をして之に入るを能せしめたのである。單に誠律のみであつたならば修道院は宛然猶太の律法教の如くなりて、多くの心ある人士を之に誘ひ得な

かつたであらう。又縦ひ修道院生活が誠律のみによりて支配せられずとするも若し誠律を以て其生命と爲し、其中心問題としたならんには、修道院は是れ一種のパーソイ派の亞流として宗教史上に何等の貢献をも遺し得なかつたであらう。

第三、個人主義　茲に個人主義と云ふは予輩の云はんとする全部を表明するに適當なりや否や疑なきにあらねども、他に適當の語あるに思ひ當らざれば、今は便宜上之を用ゐるのである。予輩の個人主義と云ふは第一、修道院の目的が世を救はんとするよりも己を救はんとするにあるを指すのである。修道僧が家族を棄て、山林に入りたりしは勿論家族を救はんが爲めではなくして、家族を棄て、己の靈魂を救はんと志したが爲めである。彼等が獨身生活を營みて家族を作らざりしは明かに家族や社會を救ふと云ふ考が皆無にして、己を救はんとするに急なりしを推すに足るのである。此點より云へば修道僧の人生觀は利己主義的なりと批評せらるゝとも、辯解の辭が無いかも知れない。然れども彼等の長處は自己を省みて惡を正し、過を改め、信に進み、義に勇み、露程も偽善の心を有せざらんとするに存するのである。勿論後になりては彼等は時代の要求に迫られて、或は蠻族教化の大任に當り、又は托鉢を爲して社會救済に心を用ゐたけれども、是は要するに修道院の本分に屬せ

ずして自然と思はざる間に生ぜる副産物(By-product)であると云はねばならぬ。

第二に修道院の理想を評して個人主義であると云ふは自己の靈魂を磨くを主眼として居るので、事業を爲すに熱中せざるを指すのである。彼等は事業よりも個人の隨て自己の靈魂を重んじた。是は教會の監督等の立場と反對になつて居つた。教會の監督等は主として民を教化して堅固なる教會を建設せんとて苦心したのである。故に監督は一面に於ては政治家であり、他面に於ては事業家であつた。故に彼等は絶えず社會の出來事に注意し、時代精神(Zeitgeist)の趨勢を察せねばならぬ。其眼球は絶えず外に向はねばならなかつた。然かせざれば彼等は機會を逸する危険に陥るのである。事業を爲さねばならぬ故に常に世間に羽振りを利用す勢力家や一世の幸運兒と疎遠に成つてはならぬ。仕事を成功せしめねばならぬ故に、衆人をして自分の方に視線を集るやうに自己を廣告せねばならぬ。事業家の特色は人を相手にする事である。常に衆人の協力を仰ぎ、衆人の意を迎へねばならぬと云ふ事になるのである。故に自己内省と云ふ事は彼等に到つて困難となる。信仰の爲めに信仰を主張し、眞理の爲めに眞理を窮明し、學問の爲めに學問を爲すと云ふ純白無二の誠實は之を維持するに於て云ふべからざるの困難を感ずるのである。然る



に修道僧は自己の靈魂を磨くのが主眼であるから、社會を利用して事を爲さんとする氣は毛頭もないのである。故に其の説く所が迂遠に成り易い。而かも從等は之を説きて個人の靈魂の如何なる事業よりも尊貴なる事を示したのである。彼等の觀る所に據れば個人の靈魂の尊貴なるは事業を成就し得るが故に然るのではない。洵とに個人の衷に至高價值たる精神が内在するが爲めに然るのである。彼は蠻地を開墾し、農業を奨勵し、大學を創設し、以て西北歐の諸國を大なる恩惠の下に浴せしめた。されど彼等は斯る事業を爲したればとて、之より利益を得んとしたのではない。勿論之を得たるに相違なけれども、彼等の目指す所は政治家や實業家や實利論者やの志す所と異なり、事業の成功を目的とせずして此等の事業に由りて自己を鍛錬し、之によて一層親密に神に交はり、神と融合して自己の救を完ふせんとするに心をを用ゐたのであつた。

以上は予輩の觀たる修道院の宗教思想である。此思想には果して永遠の眞理なきや。修道院の歴史は之を暗黒の一面より判ずれば、以上の三主義に遠ざかるもの少しとせない。予輩は此暗黒面を知らざるに非ざれども、修道院の理想を知らんが爲めには暗黒面の多くは無用に屬するを以て、今は之を述べぬ事にしたのである。

惟ふに現今の思潮は修道院的ではない。人多くは誠律主義の消極的なるを好まな  
い。而して神秘主義は凡人の之を學ばんが爲めには甚だしく高遠なるに過ぎて居  
る。茲に所謂個人主義と云ふ者も實務には迂濶極まつて居ると思はるゝであらう。  
而かも人間はパンのみにて生る者に非ずとせば、今の世に於て修道院の理想、而かも  
歐洲に於て千有餘年間文化の源泉の一となりし修道院の宗教思想を研究するも、亦  
之を全く愚者の徒勞とのみ看做し難きには非ざるか。(大正九年十一月八日 夜  
稿了)